

学校

石岡

ふるさと歴史館第十四回企画展

学問手習之儀

若年之子弟第一に可相励

―教育で見る石岡の明治維新―



英学必携（明治5年）



庭訓往来（江戸後期）

平成30年 5月2日(水)～7月29日(日)

午前10時～午後4時30分/月曜休館(祝日の場合は翌日) 入館無料

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社1-2-10 石岡小学校地内 Tel:0299-23-2398

石岡市立ふるさと歴史館第14回企画展

学問手習之儀若年之子弟第一に可相励

—教育で見る石岡の明治維新—

◆目次

はじめに	1
江戸時代後期 学問所・寺子屋・私塾	2
幕末維新时期 時代の揺らぎと近代教育の芽生え	5
近代教育の発展と明治の石岡	7
番外編 学校と遺跡	9

◆例言

本冊子は、平成30年（2018）5月2日～7月29日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第14回企画展に際して作成したものです。

展示及び本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課（竹内智晴）が行いました。

◆謝辞

展示にあたっては以下の方々・機関にご協力いただきました。ありがとうございました。

石岡市立石岡小学校

鈴木 功一

額賀 均

学問手習之儀 若年之子弟第一に可相励



江戸の頃、日本の各地に藩校や寺子屋が設けられ、武士から庶民まで広く読み書きそろばんや礼節など生活の基礎知識、時には漢学や国学など高度な思想を学びました。

今回のタイトル「学問手習之儀若年之子弟第一に可相励」は、「勉強第一，一所懸命取り組みなさい」という意味です。常陸府中藩の記録、「御家御定書抜」には、藩士の義務として武芸学問に励むこととあります。石岡でも江戸時代から教育が大事にされ、常陸府中藩が設置した学問所や各地に作られた私塾で多くの人々が学びました。

今から150年前の1868年、明治元年を迎えた日本は近代国家として第一歩を踏み出します。「廃藩置県」「地租改正」などと並び、「学制」によって教育も大きく改革されました。

改革の波は石岡にも押し寄せます。別々に発展した寺子屋や学問所から、統一された公立学校へ。校舎や教科書など教育環境が一変しました。

江戸から明治への教育の変化を見ると、明治維新がいかに大きな変化だったのかがよくわかります。今回の企画展では、江戸から明治にかけ、石岡の人々が使っていた教科書や学習道具の展示を通して、石岡の明治維新を紹介します。



揺れる時代と武士の教育



武士の学校、藩校の整備

江戸時代は身分制の時代です。教育の様子も武士と庶民で分けて見ていきます。

武士には、お触れを理解し伝える国語能力、剣術などの武芸、庶民の模範となる道徳や礼儀、さらに江戸後期には諸外国に対応するための外国知識といった広範な知識が求められました。

これらを備えた人材を育てるために設置されたのが「藩校・学問所」です。幕府直轄の昌平坂学問所や水戸の弘道館こうどうかんが有名です。その多くは18世紀後半から19世紀に整備され、常陸府中藩でも文化元年(1804)に学問所が整備されています。藩校の数は全国で約270校に上り、それだけ時代が揺れ動いていたことを示しています。

藩校の教育内容

諸藩の教育は江戸を模範としました。まず最も影響を与えたのは、朱子学の昌平坂学問所わがくこうだんしよです。その他に国学の和学講談所わがくこうだんしよ、和漢・西洋医学の医学館・医学所いびやくかん いびやくしよなどがあり、様々な学問が展開されていました。

学習方法は、寛政4年に始まった「学問吟味」や翌年開始の「素読そどく吟味さんみ」から知ることができます。まずは素読から始まり、論語などのテキストを何度も読み込み正しく読めるようにします。素読を修めると学問に進み、文章の解釈など深い内容に踏み込んで学びました。



水戸・弘道館 天保12年(1841)設置
徳川斉昭の藩政改革で設置され、幕末に大きな影響を与えた

常陸府中藩の教育



武士の基本・武芸

武芸は武士の基本です。弓は日置流ひきりゅう、槍術は宝蔵院流ほうざういん、剣術は田宮流たみやと一ツ流いっしゅうが修行されました。巢鴨に鉄砲練習場があり、また馬術も修行されました。ただし、馬は数が少なく、稽古には借りてくる必要がありました。

泰平が続き、武芸の比重が軽くなっていたことを示しています。

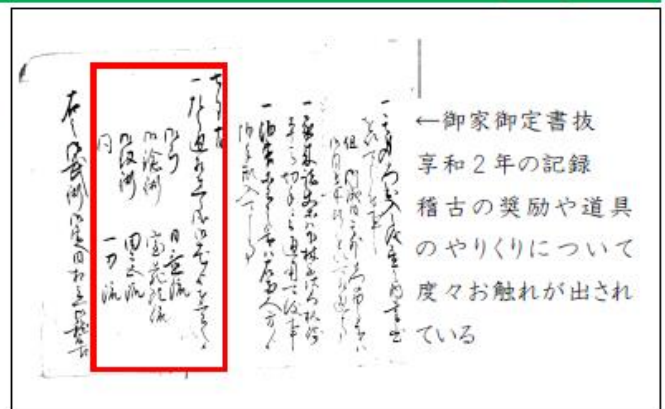
武芸文学無懈怠可心掛事

これは藩の掟に書かれた言葉です。武芸と並び読み書きなどの「手習」や儒学などの「学問」も重要でした。

手習いは幼少から20歳まで行われました。毎月5日15日25日に課題の提出が義務付けられ、今よりも基礎に長い時間をかけています。

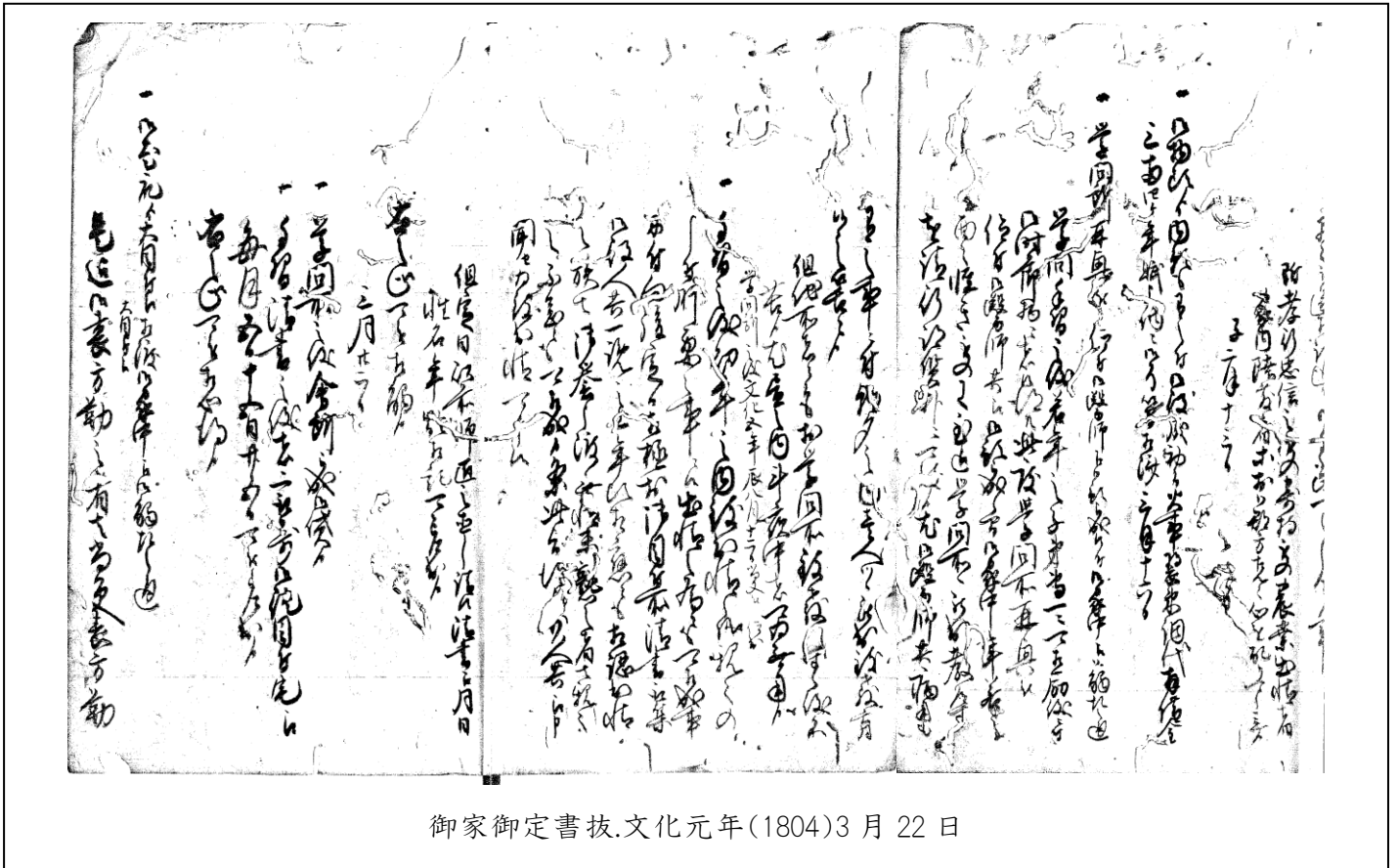
学問では儒学の素読教授として小原通齊、講釈として箕田福応齊の名前があり、素読と講釈の授業がありました。また外の儒学者に習うことも可能でした。その他の教授陣には医師がいます。蘭学者でもあった手塚良仙(光照)の名前もあり、学問所では蘭学や医学も教えられていたと推測されます。

学問の奨励は、それだけ藩政が行き詰っていたことを示しています。幕末に向けて少しずつ近世社会が傾いていく様子が、常陸府中藩でも読み取れます。



←御家御定書抜
享和2年の記録
稽古の奨励や道具
のやりくりについて
度々お触れが出されて
いる

御家御定書抜 (石岡小学校所蔵)



御家御定書抜.文化元年(1804)3月22日

御家御定書抜は、常陸府中藩に関連するお触れや家中の様子が記録されたもので、寛政元年(1789)から弘化4年(1847)までの藩政を知ることのできる貴重な史料です。

文化元年3月に学問所を再興するお触れが出されています。19世紀前半の文化・文政期は、財政難に陥っていた常陸府中藩が藩政改革を行う時期です。学問所の再興は、藩政を立て直せる人物を急ぎ育てるといふ藩政改革の第一歩でした。

読書・手習・芸能，庶民の教育



民衆教育が花開いた時代

日本の民衆教育は室町時代末頃に始まったとされ、江戸時代中期の元禄年間(1688～1703)頃に普及が進みます。これは経済の発展に伴い、幕府の出すお触れを理解し、その制度に則って物の売買や年貢を納める必要が出てきたためです。幕末に向けて寺子屋は増え、全国に数万もあったとされています。

幕府も教育の普及を後押ししました。享保の改革では朱子学などの学問を一般民衆に開放しています。結果、嘉永年間(1830～1843)には就学率が7割から9割に達したといわれています。

寺子屋の様子

寺子屋の生徒数は20名ほどが一般的です。江戸中期の儒学者、貝原益軒が著した江戸時代の学習指導要領『和俗童子訓』わぞくどうじくんによれば、学習内容は読書・手習・芸能(学問)に大別されます。学ぶべき内容は武士と変わりませんが、重視する部分が異なります。寺子屋では、まず手習である習字を習います。その後、庭訓往来などの参考書を読書し文章力などを身に着けます。また、商売が盛んな地域では基礎的な算術も学びました。多くの子どもは6歳頃に入学し、読み書きを身に着けると12・3歳程で卒業し奉公に出ました。中には学問に進み四書・五経などを学ぶ者もいましたが、少数派です。寺子屋は子どもたちに働く準備をさせる、実用的な知識を重視する場所でした。



写真は、大正・昭和期の帳簿
江戸時代も「大福帳」など同様の帳簿が使われ、売り上げなどを記録した

石岡の近世教育



寺子屋・私塾の設置

江戸時代後半から多くの寺子屋・私塾が開かれました。

府中の代表的な寺子屋には照光寺学寮、私塾では親子三代に渡って教鞭を振るった兼子塾が挙げられます。寺院や武士、名主など様々な身分の人が教育機会を提供していました。経営者の違いは、教える内容にも違いを生み、中にはいくつかの寺子屋を掛け持ちする好学の者も出ました。

教育内容にみる近世石岡の特徴

石岡の寺子屋・私塾で最も重視されたのは読み書き、そして算術です。商業が盛んであった石岡の特徴が表れています。

石岡の教育方針を示す逸話として、新選組の鈴木三樹三郎の私塾の話があります。彼は家族から引き継ぎ、東大橋で私塾を経営していましたが、手習に熱心でなく戦いの真似ばかりしていました。その結果、塾生はみな退塾してしまい、閉塾してしまったそうです。

石岡は商業で大きく発展した地域です。戦よりも商業が近世石岡の人々の考え方だったのでしょう。また、外国の圧力や天災・飢饉などで社会が不安定になりつつある時期でも、石岡の庶民は比較的平穏に生活していたこともわかります。



照光寺(府中二丁目)
寺子屋の後、明治でも小学校として続いた夜学なども行われ多くの生徒が学んだ

幕末、新たな学校の設置



江戸から府中・長沼へ

幕末動乱期、常陸府中藩も維新の大波に巻き込まれました。時代の変化に対応するため、教育環境も変化します。「定府」であり江戸が中心だったのが、府中・長沼が地域経営の中心に変化しました。それぞれに教育機関が整備され、府中では慶應元年(1865)頃に「文学館」、長沼では明治2年(1869)に「興風館」が設置されました。その後、府中では「文武館(文武学校)」が設置されました。

幕末維新时期の教育内容

教育内容は「和・漢学, 算, 筆道, 習礼」, 学風は水戸学でした。「石岡藩給録」によると、文武教授, 助教, 補助が置かれており、文武両道を教えました。

「手塚正太郎翁略歴」によれば、10歳から16歳まで文学館で学んでいます。人によっては藩兵として勤めるため15歳ごろに卒業していません。就学期間は人それぞれだったようです。

学問に打ち込む者と兵士として武芸に励む者で別れる点に、内乱で揺れる幕末の武家社会の様子が見られます。



府中陣屋図 図説石岡市史,p.123 掲載
左下赤枠部分が文武館と調練場
ここで文武両道を学んだ
また、文化年間に始まった府中・長沼の武士教育は会所において行われた
青枠部分にも道場があり、江戸後期から幕末にかけて教育が行われたと思われる

幕末の庶民教育と水戸学



水戸学の影響

幕末になると、石岡の寺子屋・私塾の中に水戸学の「敬天愛人」思想の影響を受けるものが出てきます。

旧井関村などは水戸藩領であり、また近隣には水戸藩校の分校・小川郷校も設置されていました。水戸学の薫陶を受けた人々が、郷里に戻り、あるいは招かれ、人材育成に取り組みました。

水戸学の影響を受けた私塾はいくつかありますが、今回はその中から「長峰塾」を紹介します。

教育者、晩香先生

長峰塾は井関村の庄屋を務めた鈴木銀四郎によって開かれました。

銀四郎は天保9年(1838)に生まれ、10歳から田伏村(現かすみがうら市田伏)の積翠塾で学びました。銀四郎は「晩香」と号していますが、これは積翠塾の師・斎藤晩晴から晩の字をもらったものです。安政元年(1854)から小川郷校で学び、安政5年には水戸に留学し彰考館の写字生に任じられます。家の事情で彰考館勤めは短期で終わりますが、この頃に会沢正志斎などの薫陶を受け水戸学に傾倒し、尊王攘夷運動にも参加しました。

教育を非常に大切にされた人物であり、明治前期には公立学校の設置に尽力しました。



長峰塾の碑(井関)
鈴木銀四郎(晩香)の功績をたたえ、長峰塾の門弟によって建てられた

徳川時代並二明治初年ノ私塾ニ関スル調査(個人蔵)



昭和十五年九月十五日報告

時代	徳川時代並二明治初年、私塾ニ関スル調査
場所	長峰塾(新潟県長岡市) 氏名 鈴木銀四郎
経営者	鈴木銀四郎
生徒	年数不同 十人 生徒 略 三百人
授業料	年費不同 授業料 十元
教科	漢文、算術、書道、歴史、地理、自然科学
教員	鈴木銀四郎
法	講義、演習、読書、作文、習字
行幸	大正、明治
解着者	鈴木銀四郎

徳川時代並二明治初年、私塾ニ関スル調査

長峰塾(新潟県長岡市) 氏名 鈴木銀四郎

長峰塾は、徳川時代並二明治初年、私塾ニ関スル調査の結果、長峰塾で教育を受けた生徒は、大抵、長峰塾で教育を受けた。長峰塾は、長峰塾で教育を受けた生徒は、大抵、長峰塾で教育を受けた。長峰塾は、長峰塾で教育を受けた生徒は、大抵、長峰塾で教育を受けた。

徳川時代並二明治初年ノ私塾ニ関スル調査.昭和 15 年

この史料は県内の私塾に行われた調査によるもので、長峰塾で行われた教育内容を詳細に知ることができます。

教師は銀四郎 1 人、学費は受け取らず、年始などの束脩(贈答品)をもらう程度でした。経営体系は一般的な郷村部の私塾だったといえます。

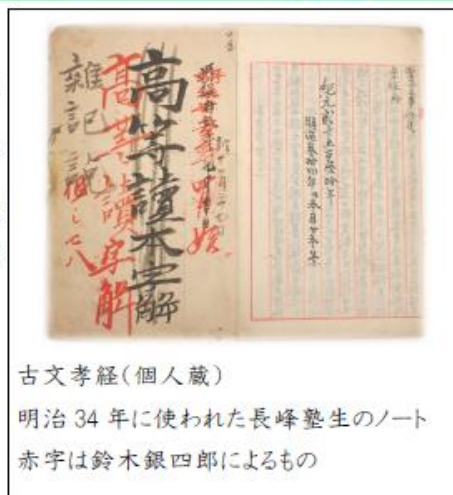
しかし、教育内容は充実しています。上の史料でも主な教科書として 19 が挙げられていますが、長峰塾の蔵書が記録された「水西山荘長峰文庫記」には 320 種が記録されており、水戸学の思想に基づき和漢の思想や医学など様々な学問が教えられました。

天朝正学を以て子弟を訓育指導す



惜陰舎，水西山荘

長峰塾は地名からつけられた通称で，正式には安政 5 年に開かれた塾を「惜陰舎」^{せきいんしゃ}，一度中断し明治 20 年の再開からは「水西山荘」^{すいせいざんそう}もしくは「水西学舎」^{すいせいがくしゃ}とといいます。惜陰舎は時間を惜しむという意味，水西山荘は徳川光圀所縁の西山荘からつけられました。水戸光圀は水戸学の源流，名前も水戸学の影響を受けています。



古文孝経(個人蔵)

明治 34 年に使われた長峰塾生のノート
赤字は鈴木銀四郎によるもの

近代の芽生え

昭和 15 年の「徳川時代並ニ明治初年ノ私塾ニ関スル調査」では，和漢書の講読，作詩・作文，習字を教え，門下生は約 300 人となっています。井関だけでなく，近隣の村々からも生徒が集まりました。

教科書は庶民教育の定番「庭訓往来」や女子教育のための「女大学」などが使われ，生活の基礎知識を教えています。一方で四書・五経や「神皇正統記」などの歴史書も使われており，近世社会では庶民に必要ななかった思想や歴史教育も行われています。理想の教育として「天朝正学(後の水戸学)を以て子弟を訓育指導す」とあり，水戸学の思想が教育の根底に据えられています。

長峰塾からは，庶民が自立し市民社会を形成する，近代社会の準備が，水戸学という風を受けて石岡の各地で動き始めていたことがわかります。

近代教育の幕開け



「邑に不学の戸なく」，近代教育の幕開け

今から 150 年前の 1868 年，明治の世になると，新政府は早々に教育改革に乗り出します。明治 2 年布告の「府県施政順序」では小学校設置の項が設けられています。

明治 4 年，廃藩置県が成り新政府の体制が整備されると，同年文部省が設置され全国で統一された教育体制の構築が本格的に進められます。

そして明治 5 年，「学制」の発布により日本の近代教育が幕を開けました。

石岡小学校誕生

学制では石岡・高浜・三村・関川は第 1 大学区第 28 中学区に位置付けられました。この中でまず石岡地区に公立小学校を設置することになりました。

明治 6 年に開校準備が開始されます。当初の校舎は費用節約のため，東耀寺と照光寺に置かれました。東耀寺が男子校で新治地域の第 4 校，照光寺が女子校で第 5 校でした。そして同年 6 月 21 日，2 校とも開校式が開かれます。最初の入学生は 104 人でスタートしました。

その後，明治 8 年に新校舎ができ，近代教育の体制が整いました。



東耀寺(若宮一丁目)

急激な改革は財政の大きな負担となった
しかし，それだけの負担を押しても整備された点に，明治政府が学校教育制を重要視していたことが表れている

教育は近代の基本



近代教育の心

学制発布を受け、石岡は新治県の中心都市の一つとして早々に教育制度を整えましたが、当時の人々はそのような気持ちだったのでしょうか。

学制には「学問は身を立るの財本ともいべきものにして人たるもの誰が学ばずして可ならんや」とあります。学ぶということは生きるための基本だといっていますが、この心は石岡でも同じでした。



学制発布の儀 国立公文書館蔵

「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」とあり、すべての人に教育を提供することを目標にした石岡でもその目標を達するべく様々な努力がなされた

誰もが学問に励める社会を望む

井関の教育環境整備を求めて書かれた「公立学校二校ヲ設置スル経意」には次のようにあります。

「夫れ人として一日も欠く可からざる者は教育の道也」

学制と同様に、人間の基本として教育をとらえています。近代社会の基本は一人一人が独立した市民社会。それを実現するために、教育はとても重要な要素でした。

また、「村立私立小学校設置要項」では、貧困のため教育を受けられない子どものために、学費無料の小学校の設置を提案しています。

当時の学校教育は現在と異なり有償であり、教科書は高価でそろえられない家庭もありました。そういった家庭にも教育の機会を提供しようとする姿勢は先駆的であり、教育の非常に重要視していたことを示しています。

教科書に見る近代の石岡



近代教育の科目

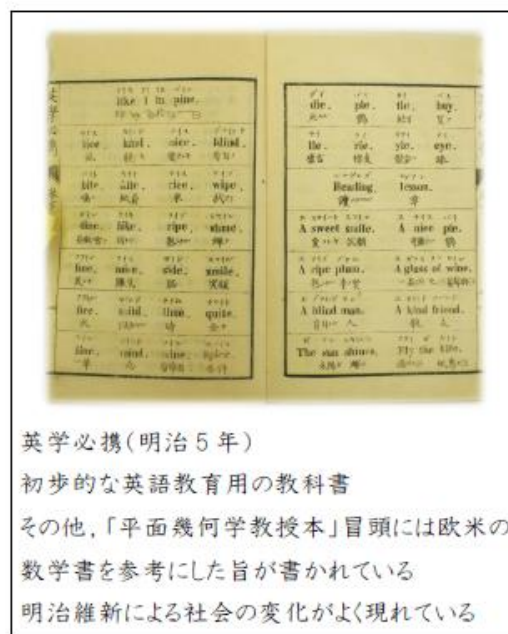
明治14年に制定された「小学校教則綱領」で、小学校の科目として初等科に修身・読書・修辞など、中等科に地理・歴史・物理など、高等科に化学、幾何学、経済などが設定されました。

石岡で使われた教科書

石岡の豪商、村田宗右衛門家の資料には、多くの教科書類が残されています。明治期の教科書としては「小学科本日本略史」「平面幾何学教授本」「小学作文書」「小学理科書」などがあり、当時の石岡の教育環境がわかります。

教科書類の中で注目されるものとして「英学必携」があります。当時の日本は、工業などと並び教育も欧米を参考としました。学制では日本語で授業する小学校とは別に、英語を用いる小学校も設定されています。英学必携は欧米に追い付こうと一所懸命だった時代を象徴する教科書です。

英学必携からは、石岡の商人は早くから海外の技術に目を向けていたことがわかります。英語を学び、技術を身に付け、明治にさらなる発展を目指した商都の様子が伺えます。



英学必携(明治5年)

初歩的な英語教育用の教科書

その他、「平面幾何学教授本」冒頭には欧米の数学書を参考にした旨が書かれている

明治維新による社会の変化がよく現れている

教育で見る石岡の明治維新



ここまで見てきた江戸から明治への教育と社会の変化を、最後に簡単にまとめをします。

江戸時代後期・教育の黎明期

武士は武芸の比重が下がる一方、学問所が整備され藩政を立て直せる人材の育成が急がれます。庶民は各地の寺子屋や私塾で読み書きを学び、また商売が盛んだったことを反映しそろばんが人気でした。社会が揺らぐ中、庶民は平穏を保っていました。

幕末、揺らぐ社会と教育の変化

武士も庶民も新時代の準備を進めました。武士は武芸に励む者と学問に打ち込む者が分かれます。庶民は、これまで必要とされなかった思想や歴史を学ぶものがでてきます。庶民の自立という近代の芽生えが石岡でも確認できます。

明治、近代の幕開け

石岡は新治県域の中心都市の一つとして早々に教育環境の整備が進められます。欧米の先進国に追いつくため、数学や理科、社会など近世には庶民にはいなかった科目が教えられるようになります。商都・石岡の商人は英語を学ぶなど、新時代の到来を発展の機会に変えるべく取り組みました。

今年は明治 150 年にあたります。学校教育をはじめ、様々な制度の礎が明治維新で築かれました。そして私たちは、その礎の上に今の社会を作り豊かな生活を享受しています。明治 150 年の節目の年に、歴史は今と繋がっているんだということを感じていただければ幸いです。

番外編、学校と遺跡



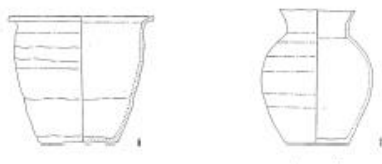
番外編として、昨年度末に確認された学校と所縁のある資料を紹介します。

南中出土蔵骨器

遺跡と学校は深い関係にあります。石岡には現在、小中高を合わせると 28 の学校がありますが、うち 15 校が遺跡の範囲内に位置しています。中には石岡小学校のように発掘調査によって地域の貴重な歴史を明らかにする第一歩になったところもあります。また、現在に至るまで多くの先生に文化財保護活動へご協力いただいています。

今回展示する資料は、昭和 30 年に行われた石岡市内の旧南中学校造成工事で出土したと伝えられるものです。須恵器壺と土師器甕の組み合わせで、壺を甕が覆っていたものと思われます。壺の口縁部に意図的な破損が見られるなど、古代八郷の墓制を考える上で貴重な資料です。

造成工事などで確認された資料は、地域の歴史を示す教材として活用されました。本資料も旧南中学校の資料室で保管され、中学生に学校周辺の歴史を教えるのに活用されました。地域教育を示す資料としても重要な遺物です。



南中出土土器実測図

婆良岐考古 11 号.1989.p.65 掲載



南中出土土器底面

石岡市立ふるさと歴史館第14回企画展
学問手習之儀若年之子弟第一に可相励

—教育で見る石岡の明治維新—

平成30年5月2日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195

石岡市柿岡 5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016

石岡市総社 1-2-10